

木野通信

7
号

京都精華短期大学

〒606 京都市左京区岩倉木野町37の1

TEL (075)791-6131

四年制美術学部の'78開設見送られる。 英語英文科の定員増は認可!

本学は1977年4月に創立10周年を迎えます。そこで「木野通信」第7号が発行されるのを機会に、この間の経過と現状をお知らせいたします。

本学は1968年、「自由自治主義の教育」「凝集教育」「国際主義の教育」を基礎とする「人間形成の教育」を目的とし、国際的都市であるとともに日本の文化芸術の伝統を育んできた京都に創設されました。国際舞台で活躍できる人材養成をめざす英語英文科、創造性豊かな芸術家の育成を求める美術科、両科にまたがる一般教育の三課程がおかれていますが、すでに卒業生は2,000名を越え、各界において、将来を嘱望されている者も少なくありません。また、入学希望者も増加の一途をたどり、現在の入学定員、英語英文科・美術科各150名に対し4倍を越えており、在学生も1,400名に達しております。

本学では、このような入学希望者の増加にこたえるために、教職員の増員、校地および運動場用地の取得、校舎の増築拡大などの努力を重ねてきました。現在、教員47名職員33名計80名、校地および運動場は、ここ三年間に9,000m²増えて、55,000m²、校舎は、この三年間に1,200m²の増で、9,000m²となっています。

こうした教学条件の整備は、短大教育のいっそうの充実発展のためですが、同時に開学以来の念願であります四年制大学設立のための努力でもあります。1975年7月には「京都精華大学美術学部」の設置のための「学校法人寄附行為変更認可申請書」を文部省に提出しました。その結果、

(1) 短大英語英文科の定員と実員の格差を正を計ること

(2) 教育条件の整備を計ること

を理由に、開学予定の1977年を1年延ばすようにとの指導がありました。そこで本学では、1976年6月、英語英文科の収容定員を150名から250名に増加変更する申請書を提出し、また同年7月に「京都精華大学美術学部」設置に係る申請書を、1978年4月に開学するものとして、前年にひきつづき再度、文部省に提出しました。

申請の結果、英語英文科定員の増加変更は認可の通知をうけ、1977年4月から実施できることになりました。もう一つの「京都精華大学美術学部」設置の申請については、文部省の審議の結果、残念ながら、次の理由によって、断念してほしい旨の連絡がありました。

(1) 京都は「政令指定都市」であること

(2) 京都では美術系大学の収容人員は十分である

私たちは、京都が政令都市（法律により大学等の新增設を抑制する都市）に指定されていることは十分承知しておりましたが、実際に、私立の四年制美術大学を早急に設置してほしいという、受験生、在学生、高校美術教員、美術団体など各界各層の強い要望を支えとして、開学への努力を続けてきました。こうした各界各層の要請を無視した今回の措置に対してはまことに遺憾に思います。私たちが文部省関係者に対し、京都の特殊性と四年制美術大学設置の必要性を十分認識してもらう努力が足りなかったのではないかと反省もしております。したがって、私たちは、再々度、1979年開学をめざして努力を傾けるべく決意を新たにしております。

本学の将来構想

本学は、開学以来、4年制大学の設立を最大の目標としてきました。この4年制大学もあと一步で設立の諸準備がおわろうとしています。そこでこの4年制大学の設立を含めて本学の将来構想について述べることにします。

本学の遠い将来の規模は、大学2学部、短大2学科、学生総数約3,000名としたいと考えています。もちろんこれは、開学以来、本学の教育理想を実現しその成果をあげるために、本学が実行してまいりました考え方にもとづくものです。

この構想の実現は、一朝一夕にして出来るものでなくいくつかの困難を克服しなければなりません。本学ではこの構想の実現のために、当面、次の目標を上げ、その具体化に努力しています。

1. 美術学部の設立

開学以来の計画であり、現在の短大の美術科で達成してきた成果の上に立って、美術を中心として美

キヤンパストピックス

第9回木野祭

「参加」というテーマで、本年は10月31日から11月3日までおこなわれた。例年のように模擬店が圧倒的に多く、「フライドポテトの店」、「ボランティア」「ゲイバー—立体造形」「きっさ店—作詞作曲同好会」「全吉—朝鮮料理」「やきとり屋—神明荘」等、約40の店が出た。映画会は「市民ケーン」「死刑台のメロディ」。英語劇はE・S・Sの学生によってオード・ヘンリーの「最後の一葉」。他にロック、フォーク、ウェスタン等の演奏会も多かった。形も中味も例年通りで、特筆すべき催しもなかった。多くの学生が帰省してしまうということもあり、《祭》の華やかさや意味づけにかけていたようだ。

アッセンブリ・アワー

5月6日「いま美とは何か」寺山修司(劇作家)。5月13日「解放教育の原点」藤田敬一(岐阜大学講師)。5月20日「アフリカの人・自然・芸術」木村重信(大阪大学教授)。6月3日映画「水俣—患者さんとその世界」。6月17日「天皇制を問う」松浦玲(歴史評論家)。7月1日「靈魂の形について—文学的考察」多田智満子(詩人・仏文學者)。9月16日「もう一つの京都」吉田光邦(京大人文研助教授)。10月7日「天下大乱の時代」武藤一洋(評論家)。10月21日「宮沢賢治の世界」吉本隆明(詩人・評論家)。11月18日「人間の深奥にあるもの」高

術と文化を探究する4年制大学の美術学部をつくる。

2. 短大英語英文科の定員増

短大英語英文科の特色と成果を生かしながら、英語を中心として、言語と文化の領域を探求する学科として充実させ、入学者の門戸を広く聞くことにする。

3. 人文系学部の増設の準備

短大の一般教育と英語英文科を中心とした人間、社会、自然の領域を総合的に探究する学部をつくるための準備をする。

この3つの課題を、具体的にするために次の事業を実施しております。

(1) 美術学部校舎建築

(2) 小運動場の造成

(3) 校舎の整備

(4) 校地の整備

(5) 校地、校舎の拡張の準備

(6) 教職員の待遇改善及び教育研究条件の充実

この事業の実現には、関係者の物心両面のご支援を戴いております。

史明(作家)

こんな人が話しかに

7月7日午前10時半からⅠの21で、日系アメリカ人ロン・フジヨシ氏講演・討論集会。彼はタイ・シンガポールで労働運動、学生運動にたずさわってきた人で、現在日本で部落問題等で活動中。

10月27日午前10時40分よりセミナー館で、アイルランドのフォーク・シンガー、グラーグ・ブキャナン氏の歌をお話し。通訳は英語英文科主任の片桐ユズル先生。歌「THE OULD ORANGE FLUTE」「KELLY THE BOY FROM KILLANE」「THE WILD ROVER」「THE LAST THING ON MY MIND」「FAIR AND RAIN」等々。1155年以来イギリスの植民地となって「虐殺と武装蜂起」を繰り返してきたアイルランドの歴史を暗く秘めた歌に多くの学生が感動したようだった。

6月11日(木)漫画家の横山隆一氏と那須良輔氏来校。マンガクラスの学生を対象に講演。現代のマンガ・ブームの中での作家の質を厳しく批判。基本を大切にすることの意味を充々述べられた。

11月1日午後2時より新館四番教室で「チャリティ・ショウとお話し・討論と歌—映画スワノセ第4世界」出演者の話はボゲットさんと片桐さん。トカラ列島の中央にある「諫訪之瀬島」の自然破壊をすすめる機械文明に対して、詩人のゲイリー・スナイダーやアレン・ギンズバーグらが「スワノセ救援運動」を始めている。この映画はブルドーザーによって凌辱されていく様を刻明に記録した映画。

母国は〈戦争〉も〈平和〉もあった。

——韓国33日間滞在記——

キム 景子(絵画コース2年)

今年の夏韓国を訪た。「在日韓国人学生母国訪問団」の一員として、三十三日間滞在した。この訪問団のために京城で夏期学校が3週間開かれ、その後は自由解散となった。私は約2週間にわたり血縁者を訪た。生れてはじめて会う人がほとんどだった。

韓国の地形は大陸的だ。プサンからソウルにむけて走る急行列車から、はじめてみた窓外の眺めは牧歌的だった。赤茶けた瘦せぎすな牛がいたるところでのんびりと草をたべている。韓国では河原が広く、浅瀬な川が多いようだ。子供達が光る水面にとけ込み、水浴びをしている姿は夏の叙事詩のようだ。私はそこに「平和」を観た。驚きは大きかった。

それまではよく新聞やテレビ等マスコミ界を賑わしている「スパイ事件」や決戦状態となっている南北赤十字会談、38度線の緊張感を一層高める事件など、政治や経済に関する情報によって「私なりの韓国像」がつくり上げられていた。初めて視た韓国は違ひがありすぎた。とりわけ驚いた一というより不思議だったのは、韓国には3,500万人の国民がいて、この人達の生活や考え方について、ほんの少しも考えが及ばなかったこと。私は自分の想像力のなさに啞然とした。

ソウルの銀座と呼ばれるミヨンドン(明洞)を歩けばファッショナブルな若い女性が多い。ウィンドーは華やかに飾り立てられている。日本では見かけることのない迷彩色の軍服姿の青年とすれちがうことがある。すると戦時体制下にある國なんだと思いつたりしたものだ。確かにソウルでは緊張を感じることがあった。門番の兵士をみかけることが多い。ヘルメットを目深にかぶり、銃を肩にかけたその不動の姿勢は意思のない人形のようだった。

プサンで市場を歩いたが、楽しかった。雰囲気のなかに、一見粗暴にもみえる庶民の逞しさが漂っていた。通り一帯には店が並び、道の真中に堂々と出ている。真赤な唐辛子や季節の野菜、果物、鮮魚等が所狭しと山と積まれている。その他にも日常欠かせないものは全てある。韓国では値切るのが当然になっている。

——アイゴ！ ピサダ(高い)！

売る方も買う方も懸命に値を決める。私はこんな雑踏が好きだ。出来ることなら、どこかの隅にでもしゃがみこんでずっと眺めていたい。テレビ放送も日本のそれとあまり変わらず、子供向けのマンガがあり、流行歌・ドラマ等がある。親戚宅でテレビをみていると日本にいるような錯覚さえおこしそうだった。聴きなれない韓国語と堅いオンドルの床とか、日本でない事を教えてくれた。



夏期学校で第一線の部隊を訪問したことがある。簡素な木製の建物が幾つか並び、近くには小川も流れている。この野営地で多数の若い兵士が軍事訓練を行なっている。この日大学生だけに射撃練習が行われた。実弾がこめられ、肩にくい込んだ銃の重み、全身を貫いた衝撃を私は忘れない。岩を打ち碎いた威力を知っている。発砲の凄じい音は耳の奥にある。体中を滝のように流れ出た汗がTシャツに吸収された感触が残っている。日を追って、その手応えは確かなものとなってくる。やりきれない手応えに私は「戦争」を観たように思えた。そして一方では、旅行中の数限りない美しい思い出の中に「平和」を観た。ところが私は1人の「旅する人」にすぎないので、多くの事が絡み合い、混沌としている。自問してみると、母国である韓国を訪れたことは何であったのか……。Ⅰ世にとって韓国は「祖国」であり「故郷」である。韓国を訪れたからといってⅡ世として抱えている矛盾が簡単になくなるものでもない。わかったことは、抽象的であった韓国が実在として手掴み出来たことだ。大きな出会いであった。

★★★夏休みアメリカ体験★★★

フェアヘブン・サマー・プログラム

夏休みを利用した海外体験だったといえるかもしれません。じつにいろいろな動機から考えだされたプログラムだったのですが、基本的なテーマは学校という隔離された場ではなくて、できるかぎり直接ものごとを体験するということでした。たとえば言葉です。つまり英語で直接やりとりをしなければならないわけです（じつは、その体験は同時に自分たちの日本語も進歩させた）。プログラムのおせんだてをしたのは、受け入れ校になったワシントン州立フェアヘブン大学と津田塾大学で教えているダグラス・ラミスと、精華の片桐ユズルのふたりだった。片桐ユズルの言葉をかりれば、いろいろなレベルで変革へのきっかけを経験するだろうけれど、それを生かすかどうかはあなたしだいだということでした。

アメリカは夢の国？

宮前 敬子（英語英文科二年）

友達は皆「すばらしかった」という答えを待っているようだ、アメリカの話をするのがうとうしかった。すばらしい話をしないものだから友達は「本当にってきたの」というくらい。バンクーバー（カナダ）へ行ったとき、日本人の多いのにはうんざりした。ちょっと小ぎれいなかっこうをしていて、す



ぐ日本人だとわかる。すごく気分が悪くなかった。私だって日本人なのに日本人を見て恥しくなるなんて変なものだが、そういう人達の日本語を聞くとまたうんざりした。白人・英語がよくて日本人・日本語がイヤだという意識からではない。アメリカまでお金をばらまきにくる日本人観光客は恥しいものなのだ。

アメリカについて一息ため息

宅間小百合（英語英文科二年）

アメリカさんには悪いことしたかな、日本の使いのような目で常に「日本人より金持ちだな、こいつら」

くり返えしていえば言葉の点では、隔離された学校での勉強だけで生きた言葉を使えるようになるのだろうか、という疑いもあった。それに、この自分たちの「英語教育」に空想的な動機をあたえつづける「アメリカ」を実際に見てやろうではないか、若い日本人のあこがれる「アメリカ」、流行の「アメリカ」、旅行社がそれによってもうける「アメリカ」を見てやろうではないか、ということがあった。（あえて、行かないことを選んだ人もいたのだ!!）一ヶ月のあいだにした学習は中味の濃いものだったと思う。何人かの参加者は、仕掛け人である教師たちが考えていた公式よりも、はるかに深く、アメリカと日本の緊張、人種の問題、文化の問題にはいりこんでいた。

(つきそい)中尾ハジメ

とか「日本はまだ救われる。ああ日本人でよかった」などと比較ばかりで物事を判断して、私=日本人、あなた=アメリカさん。仕方ないですねというとらえ方。「あなたと私は違うのよ」になる。どこが違うというのだ！私はやはりこういう変なところで緊張していたようで、日本へ帰ってしまったかという気持ちとはまた別に、疲れたなあと感じた。「アメリカはどうだった」といろんな人から聞かれてても、



納得いく答えがみつからなくて、「ええ、まあまあでした」と曖昧に言ったあとで、しんどいなど嘆息が出る。

なかなかうまくいかないこと

内藤 優子（英語英文科二年）

ビジネス街へインタビューに出かけたり、いろいろ勉強させてくれた。しかしそれをあまり消化できなかったばかりでなく、話し合いのとき英語がよくわからなかったので悪いとは思いながらねむりばかりしていた。実感したことはといえば、フィリピン系の男の人に、その友人のリーという中国人とま

★★★夏休みアメリカ体験★★★

ちがえられて、イヤだなあ日本人なのにという気持ちと同時になんか嬉しいなと思った。あこがれの西洋文化は私の住んでる国とはどこか違う、場ちがいな所という気がしていたけれど、私のなかでそう認がする。その人の名前をきいておけばよかったと残念に思う。

西海岸観光ルート

藤岡 久子（絵画コース二年）

私たち三人もここまで来たのだからと、あこがれのデズニーランドへ行ったのですが、ここでもアメリカの規模の大きさ、お金の使い方の無駄、人種の混り合いの奇妙さ、あまりの人工美に、ショックの連続に終りました。その後メキシコのTijuanaに行つたのですが、またまた日本人が多いのにビックリ。



この観光地の人々の奇妙な日本語「ちょっとまで日本人」「ノー高い」「ちょっとまでその田中さん」どれだけ日本人がお金をばらまいているか、おわかりになると思います。なんども変な気分になって結局何も買えず、三時間ぐらいでサンディエゴに帰つてしまつた。なんともはや珍道中であった。

貧乏を売る町 Tijuana

梅田 和子（英語英文科二年）

バスを降りた所から観光客相手の店が軒をならべ、ほとんどの店の前には二、三人の男が立っていて呼びこむのである。路地を入っていくと、十才ぐらいの男の子とその父親らしい人が木琴をひいている。



少年が新聞を売り歩いている。彼らは、私達観光客をどのような目で見ているのだろうか。私は、自分の海外旅行できる優雅な（？）身分をどう解釈してよいのか解らない。生れた国が日本だったといってし

まえば、それまでか？パン類が六つにメレンゲ二つで五〇セント。何て安いのかしら。マンゴも一個五〇セント。歩きつかれたので、ねぎるのを忘れてしまった。

シアトルのブラック・パンサー・パーティー

青木 茂幸（英語英文専攻科）

十日間のシアトル滞在で最も印象に残っていることは黒豹党（ブラック・パンサー・パーティー）シアトル支部のエルマー・デクソンさんに会えたことである。彼は黒豹党の歴史や今日の活動状況について



話してくれた。今まで持っていたブラック・パンサーにたいするイメージは大きく変わった。彼らの今日の活動は地域社会の生活を助けるものであった。無料朝食サービス、無料医療サービスや学校であった。

ほんの少しのまわりだけみていた自分

橋本 信子（英語英文科二年）

私は私のほんの少しのまわりしか知らないかった。みていなかった。自分が生きていくのに全く困るところがない、そういう生活しか知らずに育ってきた。シアトルでマディソン・ストリートを歩いてきたんだけど、そこを歩けばアメリカの社会構造がわかる。



そのとおりに階段がならんでいる——ハイ・クラス、ロー・クラス、ミドル・クラス。これと同じことが日本もあるだろう。京都にいたっては十分みれるはずだし、日本のなかでみていたはずだった。でも、ここまでできてみせられないと、みることができなかつた私があったんだとおもう。

非常勤講師の紹介

古川 博（美術科）



—古川さんは美術科で何を担当されていますか。

◆講義はデザイン特論。実際には表象学基礎論。実技としては環境構想です。

—授業を通して獲得されようとしているものは何ですか。

◆ものには起承転結があって、定義や公理が暗黙の前提になっていますね。論理的には「簡単」なものから「複雑」なものへという道をたどるわけですが。その時「簡単」なもの、「基礎」などを当然のものとして見逃しているもの。「複雑」ものの本質よりも「簡単」ものの皮相をつかむことを通して求めているものをさぐりたいと思っています。

—前期ではどんな話をされたのですか。

◆授業の冒頭でこんな話をしたですよ。「蝶蝶が一匹とんでいる」という時、「目の前を横切っているヒラヒラとんでいるもの」という云い方も出来るわけです。「ヒラヒラ」に着目すれば、それは動的な豊かさをもった表現といえますし、動かない自己と動く対象との関係について前期では話をしたつもりです。

—後期では

◆科学は没個性的ですね。それにひきかえ科学が対象とする自然は優れて個性的です。自然を数字や概念におきかえた時、実在の自然とは離れるわけですが、重なり合うというか、両者の境界線といおうか、そうした部分について追及していくべきだと思っています。

—授業その他を通じて精華の学生についての印象をお話しさせんでしょうか。

◆そうですね。恵まれた環境を生かし切れていないですね。それと、芸術作品をつくるという事は、作品と自分が区別し難くなるということだと思ってるんです。それがないですね。プロの生き様等を模型的に学ぶことも必要だと思います。

—美術教育というのは論議のあるところですが、この点についてどう思われますか。

◆精華に即していえば、18・9の人を最初から職人化

するようにベルトコンベアに乗せることは、没個性的であり、美術本来とは全然ちがうと思うのです。専門の局地的なところばかりやっていると非常に経験的になるんですよ。むしろ、哲学とか倫理学や論理学、文学等いろんな学問の成果を利用して事物化していくことが大切なのが僕の主張です。例えばですよ、一つの言葉と100の作品、或いは逆に100の言葉と1つの作品が等価だということは「職人式教育」ではわかりっこないですよ。

—話はかわりますが、古川さんの設計された作品はどんなものがありますか。

◆京都では、住宅・工場・喫茶店といったところです。

—設計の際に一番大切にされているものは何でしょうか。

◆喫茶店の場合でいうと、そこへ来る人より少し高踏で、気取らせるものをめざします。立派すぎるものをつくると、そこへ来る人がみじめにされるからです。

—住宅の場合、西欧と比較して日本住宅の美的貧困性を指摘する人がいますが……

◆西欧の場合、各室が個性的ですね。日本の場合は各室が均質になります。日本の場合それと、室の中央を使うが、西欧の場合室のコーナーの使い方が上手ですね。これは、西欧では家を全体として一つの空間と考え、それを分断して使うことを考えたところからきています。

—発想の違いだけでなく、人間に対する理解のちがいから来るのでしょうか。

◆各空間をあらかじめ決められた使用目的にそくしてあてがうのは、人間を管理しようとする発想であると思うんです。ある手掛けをもった空間をあたえて、使う人がその空間の質を決めていくべきだと思うんです。

—そういう意味からしたら精華の空間では……

◆岩肌が一番いいですね。

—京大の建築科を卒業されたのは。

◆昭和43年です。それから2・3年は研究生という名目で残っていました。

—京大の建築を選ばれたのは何故ですか。

◆自分のことは文学的な人間だと思っていますし、高校（朱雀高校）では数学が苦手でした。高校の頃立原道造を読んだ時にヴァレリイの言葉にある「詩と科学」というのを知って、その中に建築のことが書いてあったので、それなら京大の建築へでもいつて調べてやれと思ったのが動機です。

非常勤講師の紹介

ディヴィット・ジョン・ボゲット（英語英文科）



—ボゲットさんは英文科で何を担当されていますか。

◆オーラル・イングリッシュとアジアの文学を教えています。

—お生れはイギリスですね。

◆はい。ヨークシャのハンダーズフィールドで昭和23年に生れました。

◆1965年から1年間フランスのマルセイユ大学にいました。それからケンブリッジ大学に入り、1970年に卒業しました。

—アジアの現代史に関心をもっておられるようですが、何か契機になる事件があったのでしょうか。

◆ケンブリッジ大学で自治会なんかをつくってガチャガチャしているときでしたか、韓国から留学してきたいた学生が、本国に呼び戻され、反政府活動をしたということで逮捕されるということがありました。教授達も学生も大騒ぎになりました。しかし事情がわからない。情報が不足している。ということで、学生の中でワイワイいっている私を韓国に派遣することがきまつて、1970年8月に韓国に行きました。逮捕された学生や弁護士に会いました。そしてレポートをイギリスへ送ったりしていました。

—イギリスの人達は、ケンブリッジの教授達を含めて……関心の度合は？

◆彼らはアジアにはほとんど興味を示しませんでしたね。遠いというだけではないと思うのですが。

—韓国は恐いというイメージがあるのですがずいぶん、規制がきつかったんでしょう。

◆韓国では、KCIAなどの弾圧もあって、充分なことが出来ないということで、日本にきて、東京の第一ホテルに泊っていました。或る日、国連の「ウ・タント事務所」から、私が出したレポートのことで電話があって、韓国にもどりました。そして国連のイギリス代表の個人秘書になりました。そしてピョンヤンとペキンを通じてイギリス外務省へ情報を送ったり……

—金芝河にはあわれましたか？

◆あいました。いい印象はなかったです。むしろ学生運動をしている無名の人達から多くのことを学びました。彼らから痛烈に批判されましたね。彼らの批判が今の私の思想の柱になっています。

—それでは日本というの？

◆韓国に一番近い国だから。一般的な外人が日本に示す、歌舞伎・華道・茶・庭園など、全くなんセンスだし、私自身興味がないのです。

—ボゲットさんの両親はどこの出身ですか？

◆父も母も南アイルランド出身です。イングランドに出てきて、イギリス人よりもイギリス人になろうとしてきましたね。

—自分がアイルランド人であることをどう思っていますか？

◆そうですね。在英アイルランド人は在日朝鮮人に似ていますよ。アイルランド人なのですが、アイルランドの言葉がわかりませんしね。

—アイルランドには行ったことがありますか？

◆在英アイルランド人は正月に里帰りするのですが、その時期に私も……。パスポートもお金もなかったのですが、親切な老人がいて、いろいろ助けてくれました。牛を運ぶ船にのせてもらったりして…。ボゲットさんは自分のことを、在日朝鮮人に似ているとおっしゃっていましたが、「故郷」という考え方がないのでしょうか？

◆適当な言葉がみつからないのですが。例えば「Where do you come from？」ときかれても、答えられないということなんです。

—日本にもいろいろな運動がありますが、どう思いますか？

◆一つは「ペ平連」がその典型ですが、ベトナムの人がかわいそうだというインテリの運動というのは弱いですね。もう一つはイデオロギーが全部西欧の借りものだということ。自前の思想が無いですね。韓国の学生運動が強く、かつ、広い地下水脈をもっているのは、そうした点を批判し切れているからですね。

学舎の夜 彦坂直宏（用務員）

短歌

一、精華の火自然に育つヤング達
一、過疎の村音頭合ずに輪を広げ
一、吉里に江洲音頭は夜聞く
一、音頭取り鉢巻しめて手を合わす
一、おどり子の足もつかれてよろめけり

スポーツ・サークル

ラグビー部

学校創立の翌年に創部され、現在部員23名。本年9月朝日新聞の京都版で大きく掲載され、ますます意気盛んなラグビー部の最近の戦績は右記の通り。



野球部

現在14名の部員で、美術科の齊藤博先生を監督として活動中。実力はあるが、試合で力が出し切れず戦績はよくない。最近の戦績は1勝3敗。嵯峨美短大には4対7、11対14と負け続けたが藤川学園には10対4で勝利した。

記録映画“タイ10月革命”上映

セニ内閣の不安定な政治が続いていたタイで今年9月タノム元首相の僧姿での帰国が発端となって軍部クーデターがおこった。そして今タイは戒厳令下にある。私たちがこのまだ記憶にあたらしい事件を考える時“軍部クーデターがおこりえた原因、またその時の学生、一般民衆の考えはどうだったのか、そして今はどうなのか”という疑問につきあたるだろう。そしてそれと同時に“タイがこのような情勢になる以前に日貨排斥運動が起ったという事実があるが日本とタイ国との関係は今どうなっているのだろうか、そして私たちは日本人としてどういう態度をとればよいのか”と私たち自身に問い合わせられる疑問も当然でてくる。

私たちがこの疑問を真剣に考えようとするならば、1973年10月の『血の日曜日』とも呼ばれているように多くの犠牲者をだしながらもタノム独裁政権をやぶり民主政治を勝ち得たタイ学生民主主義革命を知ることが、私たち幸福な日本人(?)のとるべき態度ではないだろうか。それによって日本社会がおかれている立場が認識できるかもしれない。またそのこと

◎対愛知芸大	(吉祥院)	24-8
◎対金沢美大	(金沢)	12-3
対京都薬大	(薬大)	0-22
対京都教員	(乙訓)	0-124
対福井大	(吉祥院)	4-24
◎対長岡京市役所	(宇治)	10-8

(◎が本学チーム勝利)

以後、工芸繊維大、京都芸大、精華O B等と対戦予定。



テニス部

今年は部員もふえ、意気盛んな練習を厳しく繰り返している。

アジア・セミナー
内藤優子・鈴木美栄子
(英語英文科2年生)

が自分の足場を発見するための一つの手引きになつたらと思う。

私たちは、まずスタートに“タイ10月革命”的記録映画を精華短大で上映し事実を知る機会をつくりたい。

